



♪サヨナラは悲しい言葉じゃない

それぞれの夢へと僕らを繋ぐYELL ともに過ごした日々を胸に抱いて 飛び立つよ独りで 未来の空へ～
この歌を歌って、卒業生119名は詫間中学校を巣立っていきました。

厳粛な雰囲気の中で行われた卒業式。たくさんの方々から“贈る言葉”をいただきました。それは卒業生に対してだけでなく、在校生の皆さんにも語りかけたかった言葉だと思います。次は、君たちの番です。

卒業のはなむけとして、「一人の勇氣ある行動が世の中を変える可能性がある」という話をします。

平成7年1月17日午前5時46分、阪神淡路大震災が起き、神戸市や淡路島に甚大な被害がもたらされました。その際、神戸市内にある鷹取中学校は、最大級の避難所となり、5千人を超える避難者が生活することになりました。想定外の大災害を経験した上に、一人一人の生活様式や考え方が違うのですから、当然多くのトラブルや事件が起こります。数え切れないほどの修羅場が発生しました。

その中で、最も印象的な場面があります。水道がストップしているうえに、大人数が使うので、元々数の少ない男性用の大便器はすぐにいっぱいになり、使えなくなりました。異臭が漂い、きわめて不快な状態が続くのに、誰も掃除をしようとはしません。そして、多くの男性が女性トイレに殺到します。ボランティアとして働いていた生徒や先生方が「ここは女性用です。ルールを守ってください」と必死で訴えます。それでも、押しのけたり、突き飛ばしたりして入って来ようとしています。

そうした中、ある男子中学生が「ウォー」という叫び声とともに、男性トイレの便器の中に手を突っ込み掃除を始めました。先生方や生徒たちも続きます。「臭くない、汚くない、大丈夫だ！きれいになるから」とお互いを励ましながら。すると、それをじっと見ていた避難者たちは「私たちがしたことだから、私たちが片付けるのは当たり前だ。自分のことばかり考えていた。この子たちのおかげで目が覚めた」と言って、次々にトイレ掃除を手伝い始め、しばらくすると見違えるようにきれいになりました。

これ以降、避難者自身がトイレの掃除当番組織を作り、同じようなトラブルは少なくなり、避難所全体の規律も整っていったそうです。たった一人の男子中学生のやむにやまれぬ熱い気持ちと必死の行動が、殺伐とした避難所の空気を一変させ、規範意識を目覚めさせ、日常生活に当たり前存在するルールというものを復活させたのです。将来、困難な状況に直面したとき、みなさんにはこの男子中学生のような、正義を貫き通して難局を克服する勇氣を持つ人になってほしいと思います。そのためにも、この機会に、自分で自分を鍛え抜く姿勢を確立してください。 <校長式辞>

脳科学者の茂木健一郎さんが、次のようなことを話していました。「根拠のない自信を持って。そして、それを裏付ける努力をしろ」。これは、夢に挑戦するのに、資格も根拠も必要ない。しかし、夢を持ったならば、それを実現させるための努力をしなさい」ということだと思います。

皆さんの人生は、無限の可能性を秘めています。そこに、どんな夢を持ち、希望を持っても自由なのです。大切なのは、それを実現させるために、今の自分に何ができるかを考え、地道に努力を積み重ねることです。それは、もしかすると地味で単調なことの繰り返しかもしれませんが、しかし、自分の夢のためなら、人は強くなれると思います。未来を信じ、毎日の努力を積み重ねてください。それが皆さん自身の夢の実現につながるものだと思います。 <教育委員会あいさつ>

中学校は、心の教育の場とされています。皆さんは、中学生活で「心の力」を養いました。それは、集団で生きることであり、助け合うことの大切さを学ぶことです。そして、他人を理解することの難しさを知り、自分を知ることはもっと難しいということを学んだと思います。

これからも出会いと別れを繰り返し、何度も悩み、答えを探しながら、それでも小さな大切なものを見つけてください。そして、いつも感謝の心を忘れず、その命を大切にしてください。 <来賓あいさつ>

